# 欧米における光悦芸術の愛好

古谷　稔

## 一、再発見の書の美

日本の伝統文化の一つである書道を、次代を担う若い人々が意欲をもって継承しようとする姿勢を改めて感じたのは、二〇〇〇年（平成十二年）七月二十九日に大東文化大学書道研究所の主催による「高校生のための書道講座」に出講した際であった。全国から集まった高校生は、約二三〇名。開講式の後、「日本の書の美再発見」と題して一時間ほど、スライドを混ぜながらの講話を担当したが、書道史の話は初めての生徒もいたようで、何やら聴き慣れない内容で戸惑った面持ちの者、また食い入るように注目する者、楽しげに聴き入る者……など、さまざまであったが、それは階段教室において、講師自身に注がれる視線によって、一目瞭然であった。

当日は、一枚のレジュメを各生徒に配付したが、それはおよそ二つの項目から成り、一つは「日本の書の流れ」、二つは「再発見の書」である。さらに参考までに、西暦を入れた日本の時代区分を示した略年表を付け加えておいた。

ここで、再発見の意味を認識しておく必要があろう。再発見とは、辞書によると〝以前は注目されなかった価値などを改めて認め直すこと〟〝従来ふれられなかったそのもののよさを、新しい立場から認めなおすこと〟などと記される。〝再〟とあるからには、最初の発見ともいうべき原点の存在が先ず考えられる。これは〝温故知新〟の言葉とも共通性がある。故きを温ねて新しきを知るとは、古典を繙いてその中に新しい知識を見出すことである。

そこで試みに日本の書の中から、再発見の書として項目を立て、いくつかの遺品をおよそ次のように示した。

（1）一人で数役をこなした空海

「風信帖」「灌頂歴名」「崔子玉座右銘」「真言七祖像賛」

（2）〝真行草〟の美を追求した三跡と和様の確立

道風～「屏風土代」「三体白氏詩巻」「玉泉帖」……楷書・行書・草書

佐理～「詩懐紙」「離洛帖」「国申文帖」……草書

行成～「白氏詩巻」……行書

（3）王朝書道を再開発した本阿弥光悦

俵屋宗達の下絵料紙に書した和歌巻⇩新開発の散らし書き

右のうち、（1）では、空海が多彩な書風や書体を一人で展開させた傑出した能書であることを、実際の現存遺品をもとに述べたもの。（2）では、和様書道を確立した三跡の三者三様の活躍ぶりに焦点を当て、小野道風は楷行草の三体に巧みで「三体白氏詩巻」「玉泉帖」など一作品中に三体を取り込んだ例を示し、藤原佐理は行書主体の道風様の「詩懐紙」から、「離洛帖」など見事な草書へと発展させた独自の書風展開の偉業を伝え、さらに藤原行成においては穏和な「白氏詩巻」に代表される和様の確立ともいうべき完成度の高い行書の遺例を掲げるなど、三跡への認識を新たな視点から指摘した。

また（3）で取り上げたのは、俵屋宗達の料紙下絵と光悦の書に注目し、両者の筆に成る十数メートルに及ぶ「鶴下絵和歌巻」の巻頭から巻末へと展開する絵と書の競演をスライドによって目で追いながら、新鮮な世界を再確認した。これが、以下の本稿の主題に大きく関連するのである。

## 二、能書光悦と絵師宗達の出会い

本阿弥光悦〈一五五八―一六三七〉が、近衛信尹・松花堂昭乗とともに〝寛永の三筆〟として桃山から江戸初期に活躍した近世を代表する能書と見ることに異論はあるまい。しかも光悦の書は今日にも多数現存し、他の二者とは違ったユニークな書芸術を展開している点で、高い評価を受けている。それは単に書のみでなく、絵画をはじめ陶磁・蒔絵などの工芸や茶道など幅広い分野での活躍が窺えるが、その本領を発揮したものといえば、やはり書であろうか。

光悦が書に堪能であったことは『にぎはひ草』という随筆にみえる。天和二年〈一六八二〉の刊行で二巻から成る本書は、茶の湯・和歌・連歌など文学や芸能に関して触れ、飯尾宗祇や千利休ほか文化人に関する記載もあり、とくに光悦に触れた部分は興味深い。

この著者は、光悦の従兄弟・本阿弥光徳の孫で、佐野紹由の養嗣子となった紹益〈一六一〇―九一〉である。佐野家は灰屋と号し、桃山から江戸初期に角倉・茶屋と並び京都の町衆として繁栄した富豪で、紺灰を業とし、紺灰座・紺屋を支配した。この

紹益が京都・島原の名妓吉野を落籍したこともまた有名な話である。紹益の実父・光益は、織田有楽の弟子であった茶人であり、また能書としても聞こえた人物で、光悦が鷹が峰に移住した際に従い、同じ村で生活を共にした時期もあったようだ。

『にぎはひ草』の一こまを覗いてみよう。下巻の冒頭には、

大虚庵光悦といえる者能書たりし事は、普く世にしるしといへ共、生れ得たる心の趣かつ覚たらんもうせてなく、伝聞かんも又々なし、又世に有へき人間とは覚侍らず、今の世の有りさまを見るに、聖人賢人の道を学とするも、世をわたるためをもととするに似たり、光悦は世をわたるすべ一生さらにしらず、若かりし時より物の数を合するもののたぐひ、おもしかるしとしるもののたぐひ、一生我家の内になし、金銀手にのせたる事、昔加州の大納言直に判金を給ければ、手にとりていただきたると覚たり、其外一度も手に持ちたる事なし、

とある。能書として喧伝された光悦の名声を知ることはあっても、生来の心性の持ち味を知る人も無くなり、またそれを伝え聞くこともなくなったこと、そして光悦が自ら学んだ学芸を、世の人が自ら生活の助けとするのに対し、光悦は自らの心性を養うためであったとし、また金銀を手にしたことも一度の例外をおいて他になかったことなど、その高潔無碍な人格を称えている。

ところで、光悦については、岡倉天心やフェノロサ以来、史家や数寄者によって日本の代表的文化人として高く賞揚されてきたが、一方ではいささか客観性を欠く論評が少なくない点を踏まえて、新たに総合的な研究が試みられた。林屋辰三郎氏以下六氏による『光悦』（昭和三十九年・第一法規）の刊行がそれで、新資料の「鶴下絵和歌巻」や光悦自筆消息一五〇通の紹介はじめ、絵画・書跡・陶磁・蒔絵・嵯峨本など、光悦をめぐる桃山文化を捉えた共同研究である。光悦と宗達に関する美術史上の問題は山根有三氏の論考により、現段階の成果が窺える。

いま、光悦のきわだった特徴ともいうべき、「鶴下絵和歌巻」など、宗達の絵と光悦の書の競演による桃山時代の書芸術の一端に、少し触れておく必要があろう。

俵屋宗達は、生没年を明らかにしない謎を秘めた絵師でもある。山根氏の研究によると宗達様式と認められる遺例が、平清盛はじめ平家一門が厳島神社に奉納した装飾経として知られる「平家納経」（三十三巻・厳島神社蔵）に見えるという。それは、慶長七年〈一六〇二〉に安芸広島城主・福島正則がこの「平家納経」を修理をした際に、三十三巻のうちの願文・化城喩品・嘱累品の表紙と見返しの絵が新たに描かれた。この絵は時代的に、また貴重な遺品から見て、筆者は宗達その人の作であると見ている。これによって、光悦やその弟子が宗達下絵の料紙に書いた遺例で、この慶長七年よりも早い作はないと推察している。

ところで、多くの光悦筆の中でも宗達の金銀泥下絵と考えられる主な和歌巻に、

①四季草花下絵和歌巻（畠山記念館蔵）

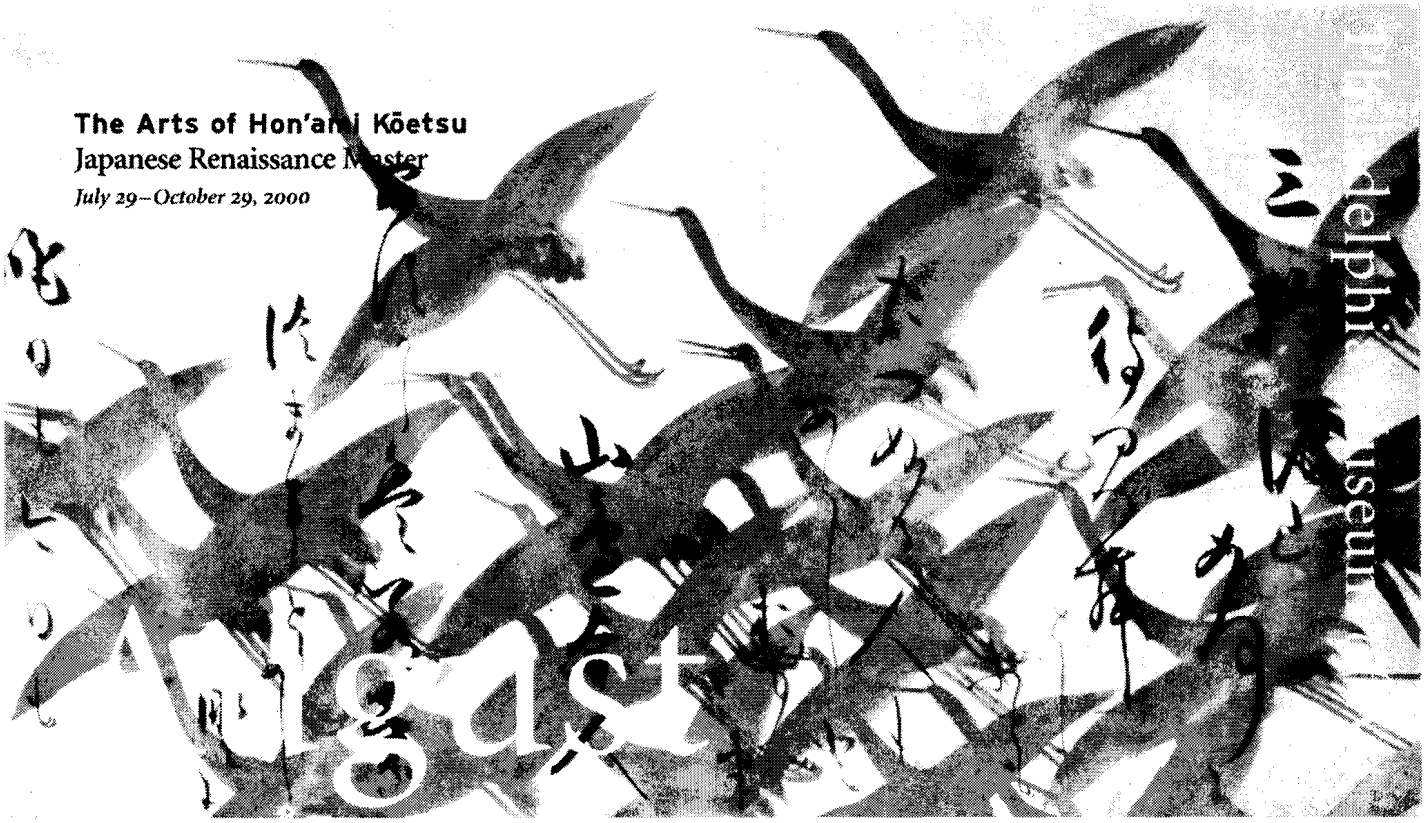
②鶴下絵和歌巻（京都国立博物館蔵）
③鹿下絵和歌巻（ＭＯＡ美術館・シアトル美術館ほか蔵）
④蓮下絵和歌巻（東京国立博物館ほか蔵）

などがある。山根氏はこのうち①と②は全巻にわたって宗達一人の筆であり、③と④は宗達が全巻を描いた後に光悦が下絵を描き添えた部分があることを図版を具体的に示しながら指摘する。そして光悦と宗達がもっとも意気投合して火花を散らした競演は、①の四季草花下絵と②の鶴下絵ではないか、と。それは慶長十五年〈一六一〇〉の頃に両者の芸術的な交渉がピークを見せ、書と画による新しい芸術を開花させたと考える。しかし、絶えず顔料や画面形式の特色を最大限に活用することに腐心した宗達は、慶長末年になると、鹿下絵のように光悦が金銀泥絵の巻物に期待するものとは違った作風へと進みはじめ、宗達は金銀泥絵の技法を以前から描いていた水墨画や扇面画などの墨や色に関心が移行し、微妙な墨画や色彩配置、さらに空間構成などが最大関心事になり、大画面の金碧障屏画の魅力にも惹かれはじめた。その結果、④の蓮下絵和歌巻の成った元和四、五年〈一六一八〜九〉に光悦と宗達の共同制作は終りを告げたと見ている。

日本書道史の上で上記の①から④までの四例を見ると、大胆な下絵は二種に分かれるようであるが、書もまたそれにともない和歌の散らし書きの方法に微妙な違いが見える。

単に下絵の上や、装飾料紙の上に文字を乗せることは、平安以後、鎌倉〜室町時代の遺品を見れば多数確認することができよう。しかし、それらの多くは料紙に施された下絵と書との響き合いまで到達したものではなかった。光悦のそれは、斬新で大胆な意匠に真っ向から立ち向かい、絵と書の鬩ぎ合いの場を現出し、未曾有の舞台を作り上げている。そして、長巻をぐんぐんと推進する力強い書風展開は、光悦独特の世界である。とはいえ、光悦芸術の確立は、やはり平安時代の古筆をはじめ、中世の長い歴史の中で育まれた書法や美意識などが基盤を成すことはいうまでもない。それゆえ、先に書の美再発見として、光悦を取り上げ、その創意工夫を讃えたのである。

右の例は、単に書と画の競演というだけでなく、文学と美術の競演でもあり、文芸の復興を顕著に示す風潮としてとらえることができる。このような斬新性は、民族を異にする外国人に注目されても不思議ではなかろう。




——フィラデルフィア美術館「The Arts of Hon'ami Kōetsu]展パンフレット
図版は本阿弥光悦筆「鶴下絵和歌巻」（京都国立博物館蔵）

## 三、欧米における光悦芸術の愛好

光悦芸術が、近代の日本文化に継承され、愛好されてきたのは、多くの数寄者の心を捉えて離さない新鮮な魅力が潜んでいるからではあるまいか。

それはわが国のみならず、意外にも欧米各地に光悦関係遺品が愛蔵され、脚光を浴びている点を見ても、さらに広範囲に世界に羽ばたいていく様子が窺える。これまで管見によるだけでも国外の公共施設やプライベートコレクションとして、多くの光悦作品の存在を確認している。次にそれらの一端を紹介する。

たとえば、昭和四十七年〈一九七二〉に東京国立博物館で開催された創立百年記念特別展「琳派」では（カッコ内の番号はカタログ掲載番号、以下同様）、

①色紙帖（五一～西ドイツ・ベルリン美術館蔵）

②鹿下絵和歌巻（五五～米国・シアトル美術館蔵）

の光悦作品が出陳された。

昭和五十三年〈一九七八〉に東京国立博物館で開催された特別展「日本の書」でも、米国から写経や古筆とともに次のような光悦作品が出陳された。

①松下絵和歌巻（二六一～クリーヴランド美術館蔵）

②木版下絵和歌巻（二六二～クリーヴランド美術館蔵）

③和歌巻（二六五～メアリー・グリッグズバーク氏蔵）

④蓮下絵和歌巻断簡（二六七～キミコ&ジョン・パワーズ夫妻蔵）

⑤蓮下絵和歌巻断簡（二六八～メアリー&ジャクソン・バーク財団蔵）

光悦関係二十三点のうちの五点が、米国からの出陳になるもの。

また、平成三年〈一九九一〉に東京国立博物館で開催された特別展「詩歌と書」では、ドイツから松花堂昭乗筆「和歌巻」（ハインツ・ゲッツェコレクション）とともに、本阿弥光悦筆「色紙帖」（ベルリン東アジア美術館蔵）が出品された。この翌年に再び東京の庭園美術館を皮切りに、福岡・名古屋・京都・横浜の五会場において「ベルリン東洋美術館名品展」が開催され、四十五年間、東と西に分断された両国が一つの新国家・ドイツ連邦共和国としての出発を記念しての展観であったが、これにも右の「色紙帖」が出陳された。

一方、外国からの要請で国外へ、光悦作品が出陳されることもあった。もっとも鮮明な記憶として残っているのが、昭和五十年〈一九七五〉十月二十五日から十二月七日まで、西ドイツのケルン市東アジア美術館における「書の美」展である。文化庁と西ドイツとの共催になるこの展覧会は、ヨーロッパで日本の書（一部、中国書跡を含む）が大々的に紹介された画期的な展覧会であり、私自身もこれに随伴した。この時、日本書道史を展望できる一三〇点の書跡の一つ本阿弥光悦筆「色紙帖」（五島美術館蔵）が出陳された。当時としては、分厚い立派なドイツ語版の展覧会カタログ「書　SHO」が作成された。その後、様々な海外展が欧米を中心に文化庁主催で開催されていった。

昨年の平成十二年〈二〇〇〇〉七月二十九日から十月二十九日まで、米国で開催された最新の展覧会を紹介しておこう。それは、フィアデルフィア美術館において開催された「本阿弥光悦の芸術」（The Arts of Hon'ami kōetsu）展である。これまで本阿弥光悦を扱った海外展ではもっとも大規模なものと思われ、これには日本の文化庁や国際交流基金の共催によって、日本から多くの光悦およびその関係作品が出陳された。もちろん米国に所蔵される光悦作品もその中に含まれ、総計一〇四点を数える。次に展覧会カタログをもとに概略を示す（カッコ内の番号はカタログ掲載番号）。

（A）金銀泥下絵巻物（断簡を含む）

①鶴下絵和歌巻（五九～京都国立博物館蔵）……三十六歌仙和歌

②鹿下絵和歌巻（五七～五島美術館蔵・五八～シアトル美術館蔵）……新古今集

③蓮下絵和歌巻（六一～昭和美術館・六二～メナード美術館・六三～メアリー&ジャクソン・バーク財団・六四～東京国立博物館・六五～楽美術館蔵）……百人一首

（B）雲母木版下絵巻物

①和歌巻（四〇～サンフランシスコ・アジア美術館蔵）……新古今集

②和歌巻断簡（四一～ニューヨーク個人蔵）……古今集

③和歌巻断簡（四二～膳所焼美術館蔵）……古今集

④和歌巻断簡（四三～萬野美術館蔵）……新古今集

⑤和歌巻断簡（四四～バウアコレクション・ジュネーブ）……新古今集

⑥和歌巻断簡（四五～大東急記念文庫蔵）……新古今集（文字は模刻）

⑦和歌巻断簡（四六～東京国立博物館蔵）……千載集

⑧和歌巻断簡（四七～マサチュセッツ・ケンブリッジ個人蔵）……千載集

（C）金銀泥木版下絵巻物

①和歌巻（四八～クリーブランド美術館蔵）……新古今集

②和歌巻（四九～東京国立博物館蔵）……古今集

③和歌巻断簡（五〇・五一～細見美術館蔵）……新古今集

④和歌巻断簡（五二～ニューオーリンズ美術館蔵）……新古今集

⑤和歌巻断簡（五三～サンフランシスコ・アジア美術館蔵）…新古今集

⑥和歌巻断簡（五五～野村美術館蔵）……新古今集

⑦和歌巻（五六～フィラデルフィア美術館蔵）……新古今集

（D）色紙（金銀泥下絵等）

①桜山吹図和歌色紙貼り交ぜ屏風（四～東京国立博物館蔵）……三十六枚所収

②和歌色紙（五A－五D～京都・個人蔵）

③和歌色紙（六～北村美術館蔵）

④和歌色紙（七～鎌倉・個人蔵）

⑤和歌色紙（八～クリーブランド美術館蔵）

⑥和歌色紙（九～メトロポリタン美術館蔵）

⑦和歌色紙（十～大和文華館蔵）

⑧和歌色紙帖（一一～五島美術館蔵）……三十六枚所収（前掲～ケルン市東アジア美術館へ出陳）

⑨和歌色紙（一二～フィラデルフィア美術館蔵）

⑩和歌色紙（一三～京都・光悦寺蔵）

⑪和歌色紙（一四～萬野美術館蔵）

⑫和歌色紙（一五～サントリー美術館蔵）

（E）短冊（金銀泥下絵）

①和歌短冊（二〇～膳所焼美術館蔵）

②和歌短冊（二一～畠山記念館蔵）

③和歌短冊（二二・二三～五島美術館蔵）

（F）扇面（金銀泥または彩色下絵等）
①和歌扇面（二四～京都・個人蔵）
②和歌扇面（二五～細見美術館蔵）
③和歌扇面（二六～京都・個人蔵）
④和歌扇面（二七～畠山記念館蔵）
（G）元和～寛永期の巻物
①立正安国論（七九～妙蓮寺蔵）……元和五年〈一六一九〉
②始聞仏乗義（八〇～妙蓮寺蔵）……元和五年〈一六一九〉
③法華題目抄（八一～本法寺蔵）
④如説修行抄（八二～本法寺蔵）
⑤松下絵和歌巻（八三～クリーブランド美術館蔵）……古今集
⑥金泥下絵和漢朗詠集（八四～ニューヨーク・アジアソサエティー蔵）
⑦金泥下絵和漢朗詠集（八五・八七～根津美術館蔵）
⑧金泥下絵和漢朗詠集（八六～ホノルル美術館蔵）
⑨雲母下絵和歌巻（八九～東京国立博物館蔵）……寛永十三年〈一六三三〉
（H）謡本（墨書）
①金銀泥下絵謡本（二九～畠山記念館蔵）……高砂・玉井・鴨・兼平
②金銀泥下絵謡本（三〇～大和文華館蔵）……藍染川
③雲母木版下絵謡本（三一～国立能楽堂蔵）……大原御幸、慶長十年〈一六〇五〉
以下、雲母木版下絵料紙、本文模刻文字の謡本（三二～法政大学野上記念室蔵、三三～東京国立博物館蔵、三四～京都・八坂神社蔵、三五～ホノルル美術館蔵）ほか。
（I）書状
（J）その他（蒔絵・陶磁）

以上、本阿弥光悦の書を中心に出陳作品を通覧してみた。前章で述べた俵屋宗達との出会いにより成った、金銀泥下絵の巻物

や、木版による金銀泥や雲母による料紙を用いることによって、光悦独特の世界が醸し出されているが、それらは幅広い作風が見える。同一人物の筆でありながら、年齢によって、料紙によって、まちまちな作風のものが出来上がっている。それらの書は本阿弥光悦自身の筆なのか、あるいは光悦の弟子や後世の、いわゆる光悦流の筆なのか、また下絵の俵屋宗達といわれる画は、宗達自身のものか、あるいは宗達の工房の筆なのか、現段階ではかなり整理がなされてはいるが、いまだ残された問題も少なくない。

たとえば、光悦と宗達との競演がなされたといいながら、多数残される光悦自筆の消息の中に、宗達との親交を伝えるものが殆どないことも不思議なことの一つである。たまたま、前掲（Ⅰ）書状は十四点が出陳されたが、その大半は蒔絵・茶碗などに付属する関連の資料としての扱いで注目され、書の美としては二次的に考えられているように窺える。そうした資料の一つとして、宗達と光悦との唯一の交流を示す書状が知られている。大和文華館蔵の九月六日付け、宗徳老宛てのもので、この文面にある「宗達」の二字によってそれと判明する。

（J）その他、「法華経蒔絵螺鈿経箱」（六七～本法寺蔵）や「芦舟蒔絵硯箱」（六八～東京国立博物館蔵）などの蒔絵や、「黒楽茶碗〈銘雨雲〉」（九一～三井文庫蔵）ほかの茶碗を見ても、日本から米国の強い要請によって出陳された名品が含まれており、光悦芸術の豊かな世界が大きく捉えられていることを痛感する。ただし、この展覧会は、日米両国の研究者が共同で開拓した要素も強く、両国の研究者や芸術家による生花や茶道のデモンストレーションをはじめ、講演やシンポジウム等も開催されて今後の日本文化研究への進展を促した点で、意義ある展覧会となったようである。

二十一世紀の書は、国内における日本書法の開発はもとより、書学書道史研究も大切であるが、さらに真の日本が世界に理解されるためにも、欧米をはじめ世界各国との文化交流とともに、よりグローバルな視野が必要とされるように思われる。